

## ■ 2024 年 年頭司牧書簡

2024 年 1 月 1 日

カトリック札幌司教区 教区長 勝谷太治

札幌教区の皆さんに年頭のご挨拶を送ります。

コロナによる行動制限がなくなり、休止していた教会の各種活動が再開し、教会活動は通常に戻ろうとしています。コロナ前に行っていた司教の公式訪問はコロナ禍にあってできずにはいましたが、その間も公式ではない形で、各地の教会を訪ね主日のミサの手伝いを続けて来ました。今も、出張や研修等の業務がない日曜日はできるだけ小教区でミサをするように努めています。昨年は 36 の主日に各地の教会を訪問することができました。例年に比べ多くの教会を訪問できたと思っていますが、それでも巡回教会を含めて 58 ある教区内の教会を主日に訪問するには数年がかりになってしまいます。少なくとも年に 1 回は小教区を訪問してほしいという声が聞こえてきますが、このように努力していることをご理解いただきたいと思います。

### 〈コロナ禍の影響〉

---

各地の教会を回って感じたことは、コロナ禍における行動制限は想像以上に教会共同体にダメージを与えたということです。以前から、教会で青年を見かけることは稀でしたが、加えて子どもを見かける教会が少なくなり、当然その親世代の姿もありません。私が訪問した時に子どもが侍者をしていた教会は極めて稀でした。それに加え、コロナ禍により教会から離れた人たちが戻らず、中止されていた様々な教会活動も再開できずにいるか、以前のような活力を失っているところが多く見受けられます。今、求められている視点は、どのようにして過去の教会の姿に戻すかではなく、今を出発点として、どのような教会の未来図を描くかということです。その為の議論が、地区や教区の宣教司牧評議会を中心に進められています。今年は、何らかの方向性が提言されるでしょう。

### 〈教会の多国籍化〉

---

一方、どこの教会を訪問しても目立ったのが外国籍信者、特にベトナム人青年の増加です。彼らが朗読等の典礼奉仕を行っている教会が多数あり、特に地方の教会でそれが顕著でした。以前の年頭書簡で触れていた「日本の教会は、日本人のみの教会ではない」ということが確実に現実化しています。ここに、進むべき教会の未来図の一端を見ることができる気がします。

### 〈継続するシノドスの歩み〉

---

シノドスの歩みについて、昨年各教会を回って多く聞かれたのが「まだシノドスやっているのですか」という声です。更にシノドス自体について理解していない人が多数いることから、ミサ後に説明の時間を設ける教会も多くありました。シノドスは 2021 年に開会が宣言され、昨年 10 月に第 1 会期を終え、今年の第 2 会期に向けて動き出しています。今回のシノドスの特徴は「会議」を目的とするのではなく、会議に向けてのプロセス、シノドス性（ともに歩む）が目的です。（今回のシノドスについての詳しい解説は一昨年の年頭書簡をご覧ください）

ください。)そして、それは会期を終えて終了するのではなく、今後の教会の歩みとして継続されていくことが期待されています。それは、とりもなおさず、各小教区自体が、互いに耳を傾け合い、すべての人が参加できる教会共同体の在り方を目指し続けることです。

### 〈見えてきた克服すべき課題〉

---

このシノドスの歩み続けるにあたり一つの課題が見えてきました。昨年、第1会期を終えるにあたり、全世界の信徒に向けて「神の民への手紙」が、バチカンから発表されました。その中に次のような一文があります。

「識別を進めるためには、教会は絶対的に最も貧しい人から始めて、すべての人の意見に耳を傾ける必要があります。そのために教会は回心の道を歩むことが必要であり、それは賛美の道でもあります。(中略)それは社会で発言する権利を否定された人や、教会からさえも排除されていると感じている人の声に耳を傾けることであり、あらゆる形の人種差別の犠牲となっている人、とりわけいくつかの地域の文化を蔑視されている先住民族の声に耳を傾けることなのです。現在の教会は何よりも回心の精神を持って、教会メンバーによる虐待の被害者となった人々の声に耳を傾け、このようなことが二度と起こらないようにするために具体的に組織として取り組む義務があります。」

この文章のメッセージを私たちの教会の身近な問題の視点でとらえると深刻な問題が浮き彫りになります。「教会からも排除されていると感じている人」。「教会メンバーによる虐待の被害者となった人々」。これは、ご存じの通り世界的に見た教会の問題を指しているものですが、決して遠くの国で起こっていることではなく、私たちの教会内でも起こっている身近な問題なのです。教区内でシノドスの歩みを進めていくために、会議のやり方を変えたり、「分かち合い」を実施したりしていくこと等いろいろなことが提案されていますが、その前提を崩しかねない現実があることが最近分かりました。それは教会内の「ハラスメント」です。

### 〈札幌教区内のハラスメントの状況〉

---

昨年、札幌司教区ハラスメント対応デスクが教区内でアンケートを実施し、584の回答が寄せられました。その中の「教会内でいじめ、いやがらせ、ハラスメントがあると思いますか」という設問に対して、41%の人があると答えたのです。そして、その内容は「司祭・修道者から」が24%だったのに対し、「信徒同士」が87%にも上りました。このアンケート調査を任意回答にした小教区もあったため、問題意識を持っている人がより多く回答したということも考えられますが、その割合の多さに驚かされます。そして、その記述内容から思っていたよりも深刻な実情が浮き彫りになってきました。個人的な関係で人格を否定されるような言動を取られて傷ついた体験も多数ありましたが、より深刻な問題と感じたのは、組織内で権威をもった信徒、あるいは肩書はともかく教会内で支配力を持った信徒によるパワーハラスメントです。そして、ハラスメントを行う人に共通していることが、その自覚がないことです。司祭が教会運営にかかわるのが難しくなっている現状を鑑みると、それに代わって指導的な役割を任される信徒にこのような問題があることは教会にとって致命的です。

ハラスメントを受け苦しむ人の存在に気づき寄り添うことは大切です。そして、ハラスメントを行っている人にそのことを自覚させることは難しいことですがさらに大切です。いじめやハラスメントを見て見ぬふりをするのではなく、現実を直視し顕在化させることが必要です。しかし、それを憎しみや復讐のような否定的な感情に基づいてなしてはなりません。私たちの共同体の中心にキリストがおられることを強く意識し、その愛に導かれるよう努

めなければなりません。否定的な思いが如何に強くともそれに支配されてはなりません。そのような時こそ、祈りと識別が必要となります。ハラスメントについては、これまで司祭のための研修をたびたびおこなってきましたが、今後は教会でリーダー的な役割を持つ信徒のための研修会を準備したい考えです。尚、ハラスメントのアンケート結果は近くまとめられ公表される予定です。

### 〈教会運営に「分かち合い」と「識別」を〉

---

シノドスの歩みを継続していくにあたり、大切な要素として指摘されているのが「分かち合い」と「識別」です。昨年の年頭書簡でも触れましたが、シノドス教区フェーズのための質問に対する、各小教区からの回答でもこれから教会の在り方を識別していくために「分かち合い」が大切であることが指摘されていました。「分かち合い」という表現は本来何らかの結論をだす「議論」には使われませんが、その精神を生かすという意味で使っていることをご了承ください。教会員すべての人の意見が尊重されるためには、強い立場の人、声の大きい人、押しの強い人の意見ばかりが通ってしまう教会の会議の在り方を見直す必要があります。まさに、この点がハラスメントの温床になっていると考えられます。気が弱く発言できずにいる人の意見も同等に重いものであり、それを無視したり、精神的な圧力で封じ込めたりすることなく相手をリスペクトして耳を傾ける姿勢は「分かち合い」の鉄則であり、シノドスの精神の根幹です。そして、私たちのこの集まりの中に主イエスがおられることを意識し続け、聖霊の導きを常を感じ取ることが「分かち合い」です。どれほど「正論」と思われる意見が、声高に提案されていても、静かに聖霊の働きを意識する人たちがその意見に違和感を持つとき「正論」＝「正解」ではないこともあるのです。識別とは本来「話し合い」と「み言葉」を聞くこと、そして「沈黙の祈り」の繰り返しの中で、選び取られていくものです。私たち一般信徒が実践する場合は、それほど厳密に時間をかけてする必要はありませんが、話し合いの結論を出す前に、み言葉に耳を傾け祈りの時間を設け、理屈ではなく、出そうとしている結論に皆が一致して希望、勇気、慰め等の肯定的な思いを持てるならば、それを聖霊の導きと判断するという方法をとることをお勧めします。

### 〈信徒中心の教会の向かうべきところ〉

---

今後信徒の教会における役割は、ますます大きくなってきます。教皇様が繰り返し教会の克服すべき悪弊と指摘しておられる「聖職者中心主義」ですが、これは、いまだ解決されない教会の現状でもあります。しかし、それは司祭の側だけの問題ではありません。なんでも司祭に頼り、全ての判断を司祭にゆだねてしまおうとする信徒の側にも問題があります。司祭のパワハラは言語道断ですが、なんでも仕切ってしまう司祭の多くは、善意をもって信徒に尽くそうと誠心誠意頑張っているのです。結果、全てを取り仕切らざるを得ない司祭になっているのです。

しかし、この現状は司祭や信徒のメンタリティーの変化を待たずに、現実が先行する形で解消されつつあります。司祭の高齢化と減少はさらに深刻になり、教会の運営は信徒に委ねられる形に変わっていかざるを得ない状況です。そして先のハラスメントアンケートでも報告されていたのですが、高齢や権限を持たない協力司祭に対する信徒による逆ハラスメントが起こっているという報告もあがってきています。信徒が権限を持つと司祭以上に権威主義的になるという指摘は以前から世界各地から報告されています。

教会の未来像を描くとき、信徒中心の教会にイエスの現存を感じられ、福音に生かされた宣教する共同体が実現するかどうか、その可能性と方向を決定づけるのは「今」の私たちです。